群れ構成の変化が仔ウマの社会関係に及ぼす影響の検討

氏名　山本　誉

指導教員　瀧本　彩加

群れで生活するということは、群れ全体だけでなく、群れを構成する個体それぞれに恩恵を与える適応的な戦略であることが分かっている (Alexander, 1974) 。また、群れで生活する社会的な動物は、群れの中の他個体と多く近接したり、毛づくろいや遊びなどの親和的社会交渉を多くおこなったりする。群れの個体と社会関係を築くことによって、個体同士の長期的な関係が維持されたり (Carter, Brand, Carter, Shorrocks, & Goldizen, 2013)、社会関係を築いた個体と離れてしまったとしても、柔軟に対応し、他の個体と新たな社会関係を構築したりする (Busson, et al., 2019)。しかし、社会関係に関する先行研究においては、群れの個体間のつながりや、群れの中から特定の個体を除去した後の、残された個体の反応などに注目したものが多く、群れ構成の変化が社会関係にどのような影響を及ぼすかといったものは非常に少ない。本研究では、高い社会性を持ち、多様な親和的社会交渉をみせるウマ（*Equus caballus*）の仔オスを対象に、群れ構成の変化が、社会関係に及ぼす影響を検討した。具体的には、群れ構成が変化しても、近接や親和的社会交渉の量は減らずに維持されるのか、群れ構成の変化によって近接や親和的社会交渉・敵対的社会交渉からなる社会関係が柔軟に変化するか否かを検討した。分析の結果、ウマの仔オスは、群れ構成が変化することによって、他個体と近接する割合が減少したり、親和的社会交渉の回数が減少したりすることはないことが示された。また、ほとんどの仔オスにおいては、群れ構成が変化すると、それまで近接割合が最も高かった個体が同じ群れに継続して存在するかどうかによらず、その近接や親和的社会交渉の相手となる個体が変化するということも明らかになった。これらの結果から、ウマのような社会的な動物にとって他個体と親和的に関わることには適応的意義があり、ウマの仔オスにおいても、群れ構成の変化に伴う社会関係の柔軟な再編成が見られ、他個体と親和的に関わる機会が維持されるのだろうと考えられる。なお、最も親密な個体が群れ構成の変化の前後で同じであった個体も少数ではあるが存在したところから、仔オスが長期にわたる社会関係を維持することができないために群れ構成の変化の前後で社会関係が変化するわけではないことは確認できている。